

玉川の草

泉鏡花

青空文庫

——これは、そゞろな秋のおもひである。青葉の雨を聞きながら——

露を其のまゝの女郎花、浅葱の優しい嫁菜の花、藤袴、また我亦紅、はよく伸び、よく茂り、慌てた蛙は、蒲の穂と間違へさうに、（我こそ）と咲いて居る。——添へて刈萱の濡れたのは、蓑にも織らず、折からの雨の姿である。中に、千鳥と名のあるのは、蕭々たる夜半の風に、野山の水に、虫の声と相触れて、チリチリ鳴りさうに思はれる……その千鳥刈萱。——通称はツリガネニンジンであるが、色も同じ桔梗を薄く絞つて、俯向け

につらくくと連り咲く紫の風鈴草、或は曙の釣鐘草と呼びたいやうな草の花など——皆、玉川の白露を鏤めたのを、——其の砧の里に実家のある、——町内の私のすぐ近所の白井氏に、殆ど毎年のやうに、土産にして頂戴する。

其年も初秋の初夜過ぎて、白井氏が玉川べりの実家へ出向いた帰りだと云つて、——夕立が地雨に成つて、しとくと降る中を、まだ寝ぬ門を訪れて、かまち框にしつとりと置いて、帰んなすつた。

慣れても、真新しい風情の中に、其の釣鐘草の交つたのが、わけて珍らしかつたのである。

かぶらぎきよかた
鏝木清方さんが——まだ浜町に居る頃である。塵も置かな

い綺麗事の庭の小さな池の縁ふちに、手で一寸劃ちよつとしきられるばかりな土に、紅蓼べにたで、露草、蚊帳釣草、犬ぢやらしなんど、雑草なみに扱はるゝのが、野山路みち、田舎の状さまを髣髴ほうふつとして、秋晴の薄日に乱れた中に、——其の釣鐘草が一茎、丈伸びて高く、すつと咲いて、たとへば月夜の村芝居に、青い幟のぼりを見るやうな、色も灯ともれて咲いて居た。

遣やりみず水の音がする。……

萩も芙蓉も、此の住居には頷かれるが、縁日の鉢植を移したり、植木屋の手に掛けたものとは思はれない。

「あれは何どうしたのです。」

と聞くと、お照さん——鏑木夫人——が、

「春ね、皆で玉川へ遊びに行きました時、——まだ何にも生えて居ない土を、一かけ持つて来たんですよ。」

即ち名所の土の傀儡師かいらいしが、箱から気を咲かせた草の面影なのであつた。

さら／＼と風に露が散る。

また遣水の音がした。

金をかけて、茶座敷を営むより、此の思ひつき至つて妙、雅がにして而して優である。

…其の後、つくし、餅草摘みに、私たち玉川へ行つた時、真似して、土を、麴一枚ばかりと、折詰を包んだ風呂敷を一度ふるつては見たものの、土手にも畦にも河原にも、すく／＼と皆気味

の悪い小さな穴がある。——釣鐘草の咲く時分に、振袖の蛇じやたい体ひゃなら好いいとして、黄あおだいしよう領蛇がが、によるひゃによる、などは肝ひゃを冷ひゃすと何だか手をつけかねた覚えがある。

「何を振廻はして居るんだな、早く水を入れて遣らないかい。」
でん／＼太鼓を貫へたやうに、馬鹿が、嬉しがつて居る家内の
あとへ、私は縁側へついて出た。

「これですもの、どつさりあつて……枝も葉もほごしてからでな
いと、何ですかね、蝶々が入つて寝て居さうで……いきなり桶へ
突込んでは氣の毒ですから。」

へん、柄にない。

フ、ンと 苦にがわらい笑わらいをする処ところだが、此処ここは一つ、敢て山のかみのために弁じたい。

秋は、これよりも深かつた。——露の凝こつた秋草を、霜早き枝のもみぢに添へて、家内が麴町の大通りの花政と云ふのから買って歸つた事がある。

……其時、おや、小さな木みみずく兔、雑司ヶ谷から飛んで来たやうな、木葉このはずく木兔あおはずく、青葉木兔とか称ふるのを提げて来た。

手広い花屋は、近まはり近在あさを求るだけでは間に合はない。其処で、房州、相模はもとより、甲州、信州、越後あたりまで——持主から山を何町歩と買ひしめて、片つ端から鎌を入れる。朝夕

の風、日南ひなたの香、雨、露、霜も、一いつとき齊ときに貨物車に積込むのださうである。——其年活けた最初の錦木は、奥州の忍しのの里、竜胆りんとうは熊野平碓氷の山やまと岨そで刈りつゝ下枝を透かした時、昼の半輪の月を裏山の峰にして、ぽかんと留まつたのが、……其の木兎で。

若い衆が串じょうだん戯いけどに生捉いけどつた。

こんな事はいくらかもある。

「洒落しやれに持つてつて御覧なせえ。」と、花政の爺おやさんが景けいぶつに寄越したのだと言ふのである。

げに人柄こそは思はるれ。……お嬢さん、奥方たち、婦人の風ふう采うさいによつては、鶯、かなりや、……せめて頬白あとり、子鳥とりともあ
るべき処ところを、よこすものが、木兎か。……あゝ人柄が思はれる。

が、秋日の縁側に、ふはりと懸り、背戸せどの草に浮上つて、傍に、其のもみぢに交る檜の枝に、団栗どんぐりの実の転げたのを見た時は、
 恰あたかも買つて来た草中から、ぽつと飛出したやうな思ひがした。

いき餌えだと言ふ。……牛肉を少々買つて、生々と差しつけては見たけれど、恚こう、嘴はしを伏せ、翼はねをすぼめ、あとじさりには、目を据ゑつゝ、あはれに悄しよげ気て、ホ、と寂しく、ホと弱く、ポポーと真昼の夢に魘うなされたやうに鳴く。

その真黄な大きな目からは、玉のやうな涙がぼろ／＼と溢こぼれさうに見える。山やまふところ懐おさなひめに抱かれた稚い媛が、悪道士、邪仙人の魔法で呪はれでもしたやうで、血の牛肉どころか、吉野、竜田の、彩色の菓子、墨絵の落雁らくがんでも喙ついはみさうに、しをらしく、いた／

しい。

……その菓子の袋を添へて、駄賃を少々。特に、もとの山へ戻すやうに、と云つて、花屋の店へ返したが。——まったく、木の葉草の花の精が頭はれたやうであつた。

こゝに於て、蝶やどりの宿を、秋の草にきづかつたのを嘲あざけらない。

「あゝ、ちらく。」

手にはごす葉を散つて、小さな白いものが飛んだ。障子をふつと潜くぐりつゝ、きのふ今日蚊帳を除つた、薄搔うすかいまき卷の、袖に、裾に、ちらくくと舞ひまうたのは、それは綿よりも軽い蘆の穂であつた。

(大正十三年十月)

青空文庫情報

底本：「花の名随筆10 十月の花」作品社

1999（平成11）年9月10日初版第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十七卷」岩波書店

1942（昭和17）年10月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：林 幸雄

2002年1月28日公開

2005年11月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

玉川の草

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>